

子どもとの出会い

— 幻視の世界 —

枝々に、新芽が淡々しい姿を見せるとき、人は、そこに生まれ出る生命の神秘を見、それが、華やかに萌え上がるとき、においやかな青春を感じる。そして、緑が濃く盛りを誇るとき、燃焼する生命や飽くなき成長の姿を見たりする。私どもはやがて、早春やたけなわの春、或いは初夏などという季節そのものなまでに、成長のイメージを与え、生命の相でとらえ始める。季節とは、人為的な時の区切りにすぎない。それは、訪れるものでも去り行くものでもなく、まして、成長や生死とは縁もゆかりもない筈であるのに。然し、私どもは、それを、恰も「人のように」見るのである。

生命なきものを、生命あるもののように見ること、これを仮りに「擬人的」と呼ぶとすれば、私どもは、いかに多くの現象



本田和子

を擬人的にとらえていることだろう。新しい朝は「訪れる」のだし、輝かしい太陽は「顔を出し」、爽やかな朝の風は「ささやく」のだ。

もちろん、これらの表現を、擬人論的世界観の現われではなく、単なる比喩、詩的形容に過ぎないと言うことは易しい。私どもの知性という名の醒めた眼は、地球の自転と公転によって、太陽の照射を受ける位置が、一定の時間毎に変化し、その変化がくり返されることを知っているのだから。

然し、太陽は、その輝かしい顔を、やはり朝毎にのぞかせ、風は爽かにささやくのではないか。私どももの心的現実としては、そちらのとらえ方がより確かであり、より真実と言えないだろうか。客観的と呼ばれるいま一つの現実の中に身を置きつつ

も、月は、やはり雲のかげに「姿をかくす」のだし、星は、依然としてひそやかに「またたく」のである。

私どもの中にも、「物質的眞実」を超えて、「イメージ的眞実」をとらえることのできる知覚が、未だ枯れ切つてはいないということであろうか。子どもとの出会いは、この「幻を見る眼、幻に感じる知覚」を、より鮮かによみがえらせてくれるように思われる。



記紀神話に見られる古代人たちの世界像は、二重の視覚から成り立っているもののように思われる。彼らの眼は、真黒な泥土から青々と萌え出した葦の芽に感動し、その生命力の神秘に讃歎の声を挙げる。「美しい葦の緑、汝萌え出づる神、うましあしかびひこぢよよ」と。

「大和しうるはし」と、その山こもれる国土を歌った彼らにとって、国土もまた、単なる自然のたたずまいを超えて、賞でいつくしむ存在、わが愛する身内であった。大和という土地を対象化し、その自然のありようを鑑賞して「うるはし」と評したのではなく、「わが愛する大和よ」と高らかに呼びかけ、そ

の呼びかけによって、愛するものとの共存が、よりむつまじく豊かであることを願ったのである。

それら古代人の国土観を証するかのように、「いざなぎ、いざなみ」二神の国づくりの過程も、次のように語られている。「伊予二名島」は、「身一つにして面四つなり。面ごとに名あり。故、伊予の国は愛比売といひ、讃岐の国は飯依比古といひ、粟の国は大宜都比売といひ、土佐の国は建依別といふ」というのである。四つに区切られる「伊予二名島」の創成は、二人の男と二人の女の誕生なのだ。男神と女神の婚姻による国生みのゆえに、生み出された島々は、それぞれに「ひめ」であり、「ひこ」であることもまた、当然と言うべきであろうか。

ところで、国土が即、神であり、山も川も木々も草も、そして泥や海の泡つぶまでが、それぞれに神であるとは、一体、何を意味するのだろうか。

わが国の古神道において、神々は人格神として完成されることなく、素朴な自然神のままに、森羅万象の中に遍在していた。自然の霊力がさながらに神であり、そのゆえに、すべての現象が神を顕現し得た。山は山でありつつも、同時に神であり得た。山に神がいますのではなく、山が神を顕現し得るのである。「伊予国」が伊予国であると同時に、「愛比売」でもあるよ

うに。古代人の眼は、まさしく、二重の視覚で世界をとらえていたのだ。

彼らにとっても、山はもちろん山であった。それは、樹々や下草を茂らせ、その枝葉に雨露を宿らせ、それらの滴りを貯えてやがて平地へと押し流す水源であった。川は、稲作に貴重な水を、田畑へと運ぶ水路である。古代人たちの冷静な眼は、それらの機能を恐らくは正確にとらえたのであろう。登呂その他の遺跡が物語るように、杭を打ち並べて水路を構築したり、畔道を作って湿地の排水を工夫したりする自然制禦の営みも、くり広げられているのだから。

しかも、それら山や川は、ヒエロファニー的瞬間には、聖を顕現する。山や川は、祭の日の「ハレのまなざし」の下で、「大山咋神」おほやまつかみであり、「弥都波能売神」みつはのめのみこと（水の名）であるのだ。自分たちが打ち並べた割り杭さえも、「角杵神」つのくひのみことと呼ばれる神であった。

古代人たちの幻視の世界像を、未発達ゆえの神秘的態度と合理的行動の混在、アニミズムの所産とのみ片付けるべきではないであろう。文化人類学者B・マリノウスキーは、メラネシアの未開民族に関して、次のような見解を示している。すなわち、彼らは、その農業活動において、極めて幼稚な道具を用い

ながら充分な収穫を上げている。それは、自然条件と農作業に關する広汎で明確な知識のゆえである。然しながら、彼らの農作業は、呪師の指導によって行なわれ、呪術が重要な位置を占めている。彼らにとつて、呪術は、農作のための欠くべからざる手続きなのだ。しかも、この二つの態度、すなわち、正確な知識に基づいて合理的かつ慎重に行爲すること、呪術に従うこと、この兩者について、それぞれの機能と効果が、彼らの中では明確に区別されている。植物の生長の自然の過程や、手入れによって避けられる害などのように、把握可能な諸条件の一群と、他方では、偶然的の災害や幸運など、予測も防備も不可能なことがらがある。前者に対しては、知識と労働で対処し、後者には、呪術でのぞむのである。科学には科学の位置を、呪術には呪術の位置を、それぞれにところを得しめよ、というわけなのだ。マリノウスキーの文章を、次に引用しよう。

「若し諸君が土人に、畑を作るのに主として呪術でやり、仕事はいい加減にすべきだ、等と暗示でもしようならば、彼はただ、諸君の単純さを、微笑で迎えるに決まっている。彼は諸君と同様に、自然的条件と原因があることを知っており、またこれらの自然力を、精神的肉体的努力で統御し得ることを、観察によって、弁えているのである。勿論、その知識は狭いもので

はめるが、その範囲に於て、健全で、神秘主義に陥らないものである。若し垣が崩れたり、種が壞れるか、乾いたり流れて了つたりしている場合、彼は呪術に訴えないで、知識と理性に導かれて、労働に依頼するであらう。然るに、他方ではまた、彼の経験は、彼の予めの慮りにも拘らず、またその努力をも超えて、因力と力があり、それがある年は雨と日照りが時を得、害虫は影をひそめ、秋には山のような収穫がある、という風に、万事をうまく滑らかに運ばせて、常でない、思いがけぬ恩沢をもたらすが、他の年にはその同じ力が、不運や不仕合をもたらし、徹頭徹尾彼に付きまとい、彼の不撓不屈の努力と、根拠の最も確実な知識とを、失敗に帰せしめることを教えたのである。これらの力を、而して唯これらの力だけを、支配するために、蛮人は呪術を用いたのである。」

合理性と呪術性がなくないまざられて展開する彼らの生活を、未分化などと軽々しく評してはなるまい。それは、すべてを一方の極に還元するという愚を避けて、それぞれの極が荷ない得る範囲の責任を分担し合うという、一段上の合理性に根ざしているというみかたすら可能なのであるから。

幼い子どもたちの描く世界像もまた、古代人や未開民族のそれに似て、二重の視覚に依拠するもののように見える。例えば、「ままごと」に與じる彼らにとつて、木の葉の上のせた砂のかたまりは、「おいしいごちそう」であり、カップの中の泥水は「デザートのコヒー」である。しかも、彼らは、それらが単に砂のかたまりであり泥水であつて、口に入れることも飢えを充たすこともできないことを知っている。観察し認識する子どもたちの手指は、それらの砂が水を加えれば柔かな泥土となり、乾けばサラサラと流れる粒子であることを把握しているし、カップの泥水は、時間の経過と共に、沈澱物と上澄みに分離することにも気付いている。そのゆえに、彼らの手は、時折、ごちそうを捏ね直し、コヒーをかきまぜるために働くのである。

遊ぶ子どもたちは、砂は砂としてどんな性情を持ち、木の葉はどこに行けば拾えるかなど、彼らなりに正確な知識を貯えてもいるし、また、絶えず新しく獲得し続けてもいる。そしてそれらは、日常的な認識する眼によってとらえられる世界の一面

である。と同時に、遊ぶ人である彼らの眼は、世界を呪術の輪の中に閉じ込めて、すべてをイリュージョン化する。「遊戯空間」という呪的世界の中で、遊ぶ人のまなざしは「おいしいごちそう」を賞味し、「きれいなお皿」を喜ぶのだ。

「ハレの日」の古代人のように、「遊びというハレの世界」において、子どもたちも、砂や水という物質に、遊戯的聖を顕現させるのである。彼らもまた、二重のまなざしに生き、二重の視覚で世界をとらえるのだ。

子どもたちとの「ままごと遊び」の中で、大人である私どもが時々、忠告を受けることがある。「うそのごちそうよ。本当に食べちゃだめよ」と。遊びという虚構の世界のごちそうのゆえに、食べることもまた虚でなければならない、と言うのである。「ハレのまなざし」の通用する範囲を、彼らは正確に知っているということであろうか。仮りに、私どもが砂のごちそうに本当に唇をふれたり、木の葉のお皿をなめてみたりするなら、子どもたちは困惑の微苦笑で愚かな大人を見守るに違いない。文明人が、農作業のすべてを呪術で行なってみることをすすめたなら、微笑んで黙殺するであろうメラネシアの原住民さながらに。

二つの極を調和的に共存させ、それぞれにところを得させる

こと、二重の視覚で世界をとらえ、ある時に、その一方を強く顕在化して日常世界を聖化すること、子ども、古代人、未開民族など、すべて原初存在に共通するのは、この特性である。そして、健やかな生において幻を見るときは、このようなあり方においてのみ、可能となるのではないだろうか。

◆ ◆ ◆
レオ・レオーニの傑作の一つに、「あおくんときいろちゃん」という絵本がある。「あおくんです」、最初の頁で主人公が紹介される。といつても、真白な画面のほぼ中央に、丸くちぎった青い色紙がポンと一つ。目も鼻も、もちろん、手足もない、丸い色のかたまりである。然し、私どもは、そこに何故か「あおくん」を見る。紛うかたなき存在感をもって、「あおくん」を感じるのだ。こうして、私どもは、いつの間にか絵本の魔術師レオ・レオーニの世界に引きずり込まれていく。無邪気で活潑でやんちゃな、わんぱく坊主の「あおくん」。おるすばんを放棄して、こっそり外へ脱走するいたずらっこの「あおくん」。「あおくん」は、絵本の画面に「見える形」として表現されているゆえに、明らかに、青い色のかたまりである。然し、その確か

な存在感において、単に「描かれたもの」ではなく、「生命あるもの」なのだ。そして私どもも、子どもたちと一緒に、「あおくん」の存在を疑わず、彼のはずんだ呼吸や、ポロポロとこぼれる涙を、極く身近に感じている。「あおくん」は確かに、私どもに親しい愛すべきいたずらっこだ。そして同時に、それは、紙の上に印刷された青い色のかたまりであるのだ。

この二重の視覚の下に、私どもは、子どもたちと安らかに楽しい生を共有する。私どもは、無理をしているのだろうか。子どもたちに合わせようとして、馬鹿馬鹿しいと思いつながら面白そうな顔をしているのだろうか。必ずしもそうではない。私たちにとつても、「あおくん」の存在が真実と感ぜられているのだし、彼がその辺をどび廻っていて不思議ではないような、そんな時間に浸っているのだ。

仮に、「あおくんの実在を信じるか」と、開き直って問われたとしたら、私どもは、必ずしも、イエスとは答え得ないかもしれない。それならば、単に「信じているふりをしている」のか、「単なるゼスチュア」だというのか。それもまた、否である。私たちは、決して「信じているふりをしている」のではない。もし、「ふり」という言葉を使うなら、その「ふり」こそ私自身であるような、「ふりをしている私」以外の私はないよ

うな、そんな状態なのである。虚構の世界に入りこんでいるからには、虚なる私こそ真実である、と言うべきであろうか。虚実一体とみることも可能であろう。無理なく、自然に、虚構の世界に身を置いて、そんな自分が極めて素直に肯定されているのだ。

そんな体験がくり返されるうち、私どもは、「物質的現実」の世界に、虚の世界の「心的現実」を持ち込むことを始めたりする。例えば、傍にいる実在のやんちゃ坊主の上に、「あおくん」をダブらせて見ていたりすることがあるのだ。身近な子どもの中から、「あおくん」がにじみ出してくる、と言うべきかもしれない。まさしく、実在の中に幻を見ることがいふことになる。

このとき、私どもが見ているのは、「実在の誰それ」、或いは「絵本のおおくん」ではなく、両者に共通する「子どものエッセンス」なのかもしれない。私にとって、微笑ましく嬉しく興味深く思っている「子どもの的なもの」を、そこに見出している、言うことも可能であろうか。

それは、二重の視覚が重なり合った地点に生まれる、一つの幻である。そのゆえに、この幻は、具体的なイメージでありつつも、抽象的な観念でもあり得る。二つの視線が一体化すると

き、イメージと観念もまた、重なり合うのである。



「物質的現実」と「心的現実」に関する差別意識が発達し、合理的知性の働きの目立ってくると、幻を見る眼が力を失い、イメージの視力は後退すると、一般には言われてきた。そして、客観的と称される「物質的現実」に密着した世界把握が前面に押し出され、一つの極の下にすべてを整合させた「物質的世界像」が形成される。イメージに代わって言葉と概念が力を持ち、王座に即く。発達とは、往々にして、このような進化の直線としてとらえられがちであった。そして、その線上に立つのが、私ども大人であると、みなされていた。

然し、私どもの中にも、幻を見る力は、失われ切っていないのではない。イメージの視力さえ回復されるなら、私どもも再び、「物質的現実」と並べて、「イメージ的、心的現実」の世界を取り戻し、生きる時空間をより広やかに拡大していくことが可能なのだ。

そのとき、私どもは、より自由に、のびやかに、自身のありようを肯定することができる。何故なら、既にいまも実践して

いるイメージ的な生き方、例えば「風のささやき」に耳を傾けたり、或いは「星のまたたき」に涙ぐんだりする自分を、感傷的などと卑下することなく、素直に正当に位置づけることが可能となるのだから。

新しい朝の「訪れ」を歓迎し、輝しい太陽の「顔」に喜びの挨拶を送るとき、私どもの日常は、何と活気に満ちたものとなることだろう。そして、よみがえった二重の視覚は、物質に還元し得ぬ真実に正当な位置を与え、同時に、物質的現実の中にも新しい幻を見出すのである。

